

食料・農業・農村政策審議会企画部会  
第2回現地調査

川根振興協議会 説明概要

農林水産省大臣官房政策課

食料・農業・農村政策審議会企画部会  
第2回現地調査

川根振興協議会 説明概要

○日 時：平成21年7月14日（火）8時45分～

○場 所：エコミュージアム川根（広島県安芸高田市）

○説明者：川根振興協議会 会長 辻駒 健二

20分という時間をいただいて、川根町振興協議会の活動内容を報告せよということでお話しをお受けできました。

私が川根というところに住ませていただいて、それから、住民活動させていただく中でやってきていることを、ご説明します。

まあいろいろと、変な理屈になり、若干説明が難しい状況もありますけれども、ひとつよろしくお願ひしたいと思います。

先ほど安芸高田市のほうからですね、住民活動については、説明させていただいたんですけど、われわれの地域というのは昭和22年頃には住民が2198人おったんです。

410戸、2198人です。それがわずか60年ちょっとですが、本日にはもう260戸しかありません。正式には240数戸になるわけなんですけど、人口はもう600人切っているという状況なんですね。

あと一番の問題は、高齢化が深刻な時期になっているわけです。一つのものさしで見れば、高齢化が進み、元気がないというんですか、もう、限界集落である、ということもあるようですけれども、私は安芸高田市の元気なまちづくりをめざして、いま、がんばらせていただいているわけです。

それで、65歳以上が人口の2分の1おります。私自身もこの8月21日で、65歳になるわけです。もう、5年すると70歳です。さらに10年、年をとると80歳になるわけです。

そうはいっても70歳まではこういう生き方をしよう、あるいは70歳になったら、80歳まではこういう生き方をしようという、地域の皆さん方が本当、生涯現役でがんばっていただける地域は、がんばっていかんやならん地域というのは、われわれが元気にしていかにゃいけん、せにゃいけん、そういうことだと思っております。

というのは、人間の幸せの分まで、行政が面倒をみてくれりゃあ、これ以上のことはないわけなんですけど、こういうことは到底考えられません。私は今までですね、行政のほうに向いて、させにゃあならん、させにゃあならん、という話をしてきました。行政はせにゃあならん、我々はさせにゃあならん、こういう関係でありました。

確かに共存という、あるいはまた、住民参加ということをよく言われますが、自分たちがどう生きるかをとということが、基本にないと、どうしても頼っていく、ということになるわけです。

私はここで生まれて、育てて生まれたわけなのですが、一時期広島に出とる。おふくろが53歳でなくなった関係で、お前は長男だから家に帰れ、ということで、田舎に帰らせていただきました。田舎に帰ったら当分、地域の皆さん方

がですね、なんやあなた親孝行だのう、ということを書いておられました。

しかし時間がたつにつれて、どうせ広島で、食い外れたから田舎へ帰ったという、皆さん方の声が聞こえました。そういうことをいうことは、自分のふるさとに、要は、生きるといふ、誇りというものが、ないと僕は見たんです。ああ、良く帰ってきたとってね、こういう形でみんな汗をかく状況にあれば、自分がここに住んどる、要は土着の心でね、愛着という気持ちがあるわけなんです。どうせ広島で食い外れたいうんで、そういう話を聞かせていただく中で自分自身がどう生きにゃいけん、ということのを考えにゃならんかったわけなんです。

次に考えたのは、はよう親父が死んでくれれば、また田舎から出ちゃうやろ、こういう生き方になりました。親父も 80 歳まではよう生きなかつたわけなんです、77 歳までがんばってくれました。お世話するのは、うちの嫁さんです。実の娘じゃありません。しかしほんととその嫁さんが、一緒に風呂に入ってやって、背中流してやる姿見てこれだなと思います。家庭の中でこういうことをせにゃならん、地域全体が、こうやってやらにゃならん。それは行政に頼るんじゃなしに、それじゃあ自分たちが、自分たちの地域をどうするか、ということを考えていかなきゃならん。私が小さいときはほんとに地域では、米がなくなれば借りに行き、醤油がなくなれば借りに行く。向こう両三軒というのですかね、ほんと家族のような付き合いをしとったわけでありまして。これもいつの間にかそういうような、つながりというんですか、情というものが薄まってきたということです。これじゃならん、という思いを述べさせていただいて、住民活動をやらせていただいているわけです。

ところで、今日、皆さん方おいでいただいたところはですね、元中学校なわけです。

ですからこの会議室の腰板、これは元の中学校の教室の床です。見えるシャンデリアは、ほんと、中学校の灯りですね。世界にひとつしかないものです。

役場は、まあ、こういうこというと、行政の関係者多いわけなんです、いい加減だなあと思いました。地域の皆さん方の声を聞いて、さてどうするかでなしに、予算をつけてやり、又さらにそりゃあもう、紙でも出しゃあうけ、この施設を守りなさい、と言う。地域とのその連携というものはありやあせん。要はそりゃあもう、上から見た、やり方がとられていたと。我々はそれではいけんと思いました。ひとつの教育の歴史をそりゃもう、仕方なしじゃありませんが、消すというということになれば、それなりに思いがある。新しい文化をここに興そうということで、この建物を活用しました。決しておんぶにだっこじゃありません。今、自分たちがこれを経営させていただいているわけです。

住民組織がこういう施設を経営しているということは、おそらく県内でもあ

りません。しかし私達は、ひとつのものを作っていく中で、知恵や意見を出しながら、そしてまた行政との連携を取りながら、自分達がここでどう生きるか、こういうことをしなきゃいけないと考えなきゃいかんと思っています。経営が目的になっちゃいけないというね、そういうことでね、いま、述べさせていただいています。

それでは地域の皆さん方が、今日もありゃあ明日もありゃあという生き方じゃなくなる。

確かに、若い者が帰ってくる農村というのは活気があるわけなんですけど、なかなか若い者が帰ってくるような状況になりません。

農業をやる人の高齢化が進んだと言われております。高齢化が進んだから農業が出来んということと言われておりますが、僕はそうじゃないと思うんです。若い者が家族を養い、そして、自分の子供が大学通っているようなね、そういう農業の実態があります。そこで私は去年の3月に、農事組合法人立ち上げさせていただいたわけなんですけれども、この農事組合法人そのものも、県内でおそらく160くらいあり、全国でも一番多いんじゃないかと思うんです。

立ち上げてみて、初めて違う組織の大切さを知りました。というのは、何言うかということ、こういう組織じゃないとお叱りを受けたわけなんですけれども、昔からあることを、それをやってりゃええというんじゃない。地域の実状とか、農家とか、施策というものを考えていかなければならない、地域の実状にあった、組織を作っていくにゃいけないと、いうことです。

今、川根に住んどるじいさんやばあさんのためにどんな制度がありますか。あれへんのです。大型農家なり、あるいは営農集団なり、担い手などいろいろについては、それなりに、補助があるわけなんですけれども、じいさんばあさんにはないのです。そんなこといっても田舎のそりゃあもう農地なり、田舎のものといえど、じいさん、ばあさんが、今以上に元気を出してくれると、むしろがこうがんばってるんだからという姿を見せることによって、子供たちが田舎に帰ってくる。あそこの地域に行って住んでみようというような、そういうようなまちづくりをせにゃならんということで、僕が農事組合法人を作らせていただいたわけなんです。

したがって、農地の集積をさせていただき、さらにそれで、県の補助金があるならそれを受け、そしてまたそれを地域に入れて、還元していくというようなやり方をさせていただいているわけです。昔から小さな面積しかない農地も、現在では稲株が残った農地は80haしかない。あとはもう長年の生産調整によって仕方がなく、もう山林原野になっている農地が多く、これを農地に復帰させるとするのは時間と金がかかるわけです。そうなるともう自然と、いまある80haの農地をどうするか、ということになります。

これが今、地域のじいちゃんばあちゃんには、年金プラス 30 万円。こういうことを言わせていただいております。住民の半分が年金生活者であり、年金は自分の口座に振り込まれます。しかし、年間 30 万円のそのお金というのは、汗をかかにはあいきけないわけです。生涯現役で、僕が元気に生活すれば、年金プラス 30 万円ということ。年間 30 万円ということは月 25,000 円。年寄りというのは計算が得意でしてねえ、月 25,000 円ということになりゃあ、1 日 800 円じゃないか、1 日 800 円というのは、ねえ、辻駒さん、時給 100 円だといいます。時給 100 円の百姓さんでね、そこでそりゃあもう、土地を元値にしてからすれば農業が出来るということ。ね、こういうことをもういっぺんやろうや、そうすればそりゃあもう、おそらく時給が 100 円から 500 円、1000 円になる、そういうことを目指していかなければならないのだと思います。

もう農業がだめだといって、いまそこに住んでる人間があきらめることによって、さて農地をどうするか、補助金なりそのようなもので農地が守られていくような、中山間は農地じゃないと、こういうことを言わせていただいております。

したがってこの学校もわれわれが運営するというのは、この施設で私達が金を儲けようと思って作ったわけではありません。ひとつの目的というのは、やっぱり自分たちの地域のひとつのシンボルになって、そこにみんなが集うという形にさせていただいておるわけです。

さきほど、ご発言がありました福祉の問題についても、一日一円募金の筒があそこにあります。これを毎年 200 本、企業の窓口とか土建屋さんの窓口や、郵便局なり、公共施設におかせていただいているわけです。また、これを毎年 280 個くらい作り、各家庭に配っていくんです。そして、川根に生まれて住んでる者は、1 日 1 円募金せい、という形をお願いさせていただいている。

皆さん方、辻駒さん、言わんとすりゃあ、もう、1 日 1 円では安いのではないか、10 円 100 円ということ。言われました。私自身、福祉ということに対して、どういう思いを持っているかという、年をとればいずれ世話にならなければいけないという考えだったんです。

要は行政に頼むというような形にね。でもこれじゃあいけんという思いもあり、要は地域でわしゃまだおいてもらえるなあ、わしゃ地域でまだ生活できるなあということ。こういう、安心して、生活していくには、自分たちが福祉というものに対して関心を持たなきゃならない。こういうことで、これをとにかく作らせていただいたわけです。

これを持っていま、一人暮らしの家庭に行って、毎週木曜日に、昼食サービスを提供させていただいているわけです。さらには、デイサービスを私の地域でさせていただくようなことになりました。そうすると小学生の児童が、わずか 23 名しかおらんわけなんです。子供たちが毎月 23 日の「ふみの日」に、

これで年寄りに手紙を出してくれるわけです。じいちゃんばあちゃん元気か、僕も元気、ほいじゃね、とって2行3行の手紙が今ではもう2枚3枚かかにかあならんというね、こういうところまでになりました。

子供たち、要は学校の教育内容までね、地域が変えていくわけじゃないですが、そこに住んどる人間が変わってくるということです。

わたしは、まちづくりというものは人づくりというものであると。人づくりということになると、自分がどう変わったというね、ここまでやっていかなきゃならないわけです。

こういうことです。要は私たちの地域は私たちでがんばっていくんだ、行政には頼らず自分たちの地域をどうにかせにゃいけんか、ということになれば、先ほども言いましたように、地域経営、こういうこともせにゃならん、ということになります。

そこで、農協が統合したことによる空き店舗を我々が譲り受けて、販売所とガソリンスタンドをやることにしました。

しかし皆さん方、農協さんが引き上げるものを我々がやって儲かりゃせんといいました。

1口1000円という出資というのは赤字補填に繋ぐ出資金をとるんだらう、ということでしたね。地域によってはわずか1000円かというお叱りを受けます。、そういうことじゃないと思っております。自分もお金を出すことによって、自分も経営者として地域も守っていこうよということですよ、こういうお願いをさせていただいたわけなんです、なかなか地域の皆さん方の合意がいただけませんでした。合意が得られない時には、そこに私が出て行って話をさせていただきました。皆さん方がここまで心配してくれるんだったら、農家のために使っていただくことによって、絶対赤字になったらあかんから、安いところについて、カレー屋さんに行くんじゃないし、自分らの店を自分たちで盛りたてるには、使っていただきたい、そういう話をさせていただいて、いま活用させていただいております。

そうはいっても私たちの地域であります。道路の改良についても、過去においては、確かにそりゃあ農地が大事か道路が大事かといえ、時代の中じゃあ、農地が大事という時代がありました。

しかしまあ、車社会の中で地域の皆さん方がほんと安心してそこでね、生活できる環境というのは道路が必要であり、道路にせにゃいけんわけです。そういうことをみんなで議論したわけなんです、なかなかそれが前に進まなかったわけですね。時間をかけて話し合い、道路をつくることに納得していただき、道路を整備してきました。

ここに来ていただいたら、玄関のところに行ってホテル祭りの名前が残って

おります。

これ今から 15、6 年前にこの祭りをきっかけに道路整備をさせていただいたわけなんです。

そのとき、私は 40 歳を少し過ぎておりましたが、私が感動したのは、なんか、田舎に住んでると、こういう生き方、要は田舎の価値観というものを皆さん方がどうやっても繋いでいかんとだめじゃなあ、ということを感じ、努力しなきゃいけないなあと思いました。

ホテルがほんと川から湧いて出る環境というものを見させていただいて、これだなあと思ったんです。

そこで、ホテル祭りを仕掛けたわけです。そうしましたら、わずか 12、3 戸の集落に数千人のお客さんがホテルを見に来たわけです。こりゃあもうこれだけの人を呼び寄せることになるなら、道路改良せにゃいけんだらうということ、皆さん方が口にしていただいた。そのときに、私は希望を書いてもらう紙をそれぞれの地域に持ち込んでいったんです。

皆さん方の思い、要はどういう道路を作るかということ、考えてくれ、書いてくれ、ということで、紙を持っていったところ、皆さん方の前のテーブル、180センチですがね、

これよりまだ 30センチくらい少ない、150センチ幅の道路整備の提案だったわけです。

やれやれこれじゃ道路にならへんがな、と思うてね、まあそりゃあみんなでも検討すればね、なかなかまとまらんと。人に優しいまちづくりということになればね、車が 60キロで走っても、ブレーキを踏まんようなね、道作りが行われとるわけなんです、まあこれはこれとしてからね、ということで、専門家にひとつ絵を描いてもらいたいと、こういう提案させていただきました。専門家に書いていただいたところ、正規調査の図面の上へ描いていただいたら 12メートル農地にかかる。そしたら皆さん方が怒ってねえ。

何でとにかく、こういう道が必要なんだということでね、要は、事業に乗せるのにはこうでなければならないと説明して、皆さんからだめだということをおっしゃいました。

やれやれこれではまた道路ができん可能性がありだなと思いました。しかし、私は、地域にはまとめ役が大事。まとめ役がおる地域というのは、いろんなことができるなあということ、ここで実感させていただいたわけなんです。実はその長老さんが、おまえら、あまりにも節操がない、行政が道を作ったらどうですかいうて提案したときには、そりゃあもう、やあ土地がどうのこうの文句を言って、自分達から作ろうとすりゃあ、もう道を作られへん、怪我でもしていただいたら大変だというね、そういう地域に情をもってね、提案したこ

とについて、農地がつぶれるからだめだということは、なんだとってですね、住民を叱るわけなんです。ま、そのことが地域の皆さん方の心をとにかく動かして、そして道路が出来ました。

一番最後までそりゃあもう、反対されて、調査の図面の上に手を置いて、用地交渉の収支の判を押すのを拒んでいたおじいちゃんがですね、道路ができたとたんに、なんと、会長さん、長生きなするもんでさあのと、話をされたわけなんです。で、その長生きはするもんですのうと、誰がそのおじいさんにそういうことを言わせたかというと、お孫さんですね。おじいちゃん、お父ちゃんが田舎に帰って百姓はするとは言っていないけど、僕が帰ってきて百姓してあげるけえと言ってくれたと嬉しそうに言っていました。

まあ田舎の風景、都会に住んでる子供は田舎の風景というのは確かにね、情緒があるわけなんです、いまの車社会の中でですね、道路ひとつ OK になれば、田舎というイメージがまた新しいイメージに変わってきたということなんじゃないかと思うわけです。

それがきっかけになってほかの地域がそりゃあもう道路改良ができていったということですから、私は先ほども行政の方から言われましたように、自分達がそこでどう生きるかということを考えていかなきゃいけないということが大切です。

それでは、住民の皆さん方にいいよる言葉というのは、われわれがボーっとしとりゃあ、役場もボーっとしとるよ。役場がボーっとしとりゃあ、そりゃあもうね、地域でとる内容もボーっとしとりますよということを、言わさせていただいてるわけなんです。決してそれはね、行政の悪口じゃありません。我々がしっかりすれば役場もしっかりする。互いに地域をどうするかということを真剣に考えることによって生き方が変わる、ということをおかせていただいているわけなんです。

いま、ほんと、地域経営をさせていただいているわけなんですけれども、私たち今まで、役場や行政の言うことは、ほんと間違いないと、こういうことで認識しておりましたが、実際考えてみるとひとつの事にとって、これからの地域どうすりゃあええということは、

地域の皆さん方が考えて、そして議論をして、そして決定していくと、こういうところまで、私たちの地域が自らやっつかんいけない。

若い者がほんと帰ってきて、ここで生活する、要は家族を養い、そして子供を大学までいかせるような状況というのは、自分たちの本当の生き方にかかっていると、実感させていただいておる、こういうことでございます。

これからもいろいろとやりますので、ひとつよろしく願いいたします。

質疑応答（Q：企画部会委員、A：辻駒会長）

Q このあたりは、山陽新聞と毎日新聞と宅配は正式にしていますか？

A していません。

Q してませんか。わかりました。

Q さきほどですね、あの年金プラス 30 万円。30 万円というのはどういう水準ですか。30 万というのは、この地域ではどんな感じなのでしょう。なぜ、50 万円じゃなくて、20 万円とかじゃなくてね、30 万円なのでしょう。

A まあ、年金プラス 30 万円というのはですね、具体的に計算したものではありません。

しかし、朝起きて、ご飯炊いて、テレビ見て寝るような生活じゃなしに、地域にいて、今考えとるのはですね、今、皆さん方に言うており、もう候補地が挙がっておりますが、喫茶店を三箇所くらい作るよう計画しております。喫茶店といってもビニールパイプで作った簡易なもので、雨風を凌げる程度のビニールハウスです。

そこに地域のおじいちゃんおばあちゃんが出てきて、お茶飲んだり、コーヒー飲んだりしながら、そこでいろんな議論をしてくれれば、やがてそのエネルギーというのは、自分たちが働くという、大根一本なり、白菜の一株などをつくり、それをどれだけ販売していくか。それがまあ、年金プラス 30 万円ということで、いま、提案しとるわけです。

Q もうひとつ。こちらにうかがう途中にですね、「農地の貸し借りは農業委員会に」という看板がありました。町内では 80 ヘクタールの大切な田んぼの貸し借りがあるんですか？

A はい、あります。

ですから、今までは隣同士ですね、この地域では半俵 3 袋、30 キロの袋が 3 袋ですか、それを基本に、貸し借りされとるわけです。住民のなかで、貸した、借りとるということをハッキリさせるのは、やはり、農業委員会をとおしてやるということにしてあります。こういうことをせんと、いつの間にか農地貸したほうが取られるというようなことが起きます。こういう話になってはならんということで、そういうことをさせていただいております。

Q 日本の集落がかなり、限界集落にすすんでいるのですが、その一方で日本のいろんな制度のなかで、崩壊しかかっているのが、新聞の宅配制度なんですね。これはまあ、よくお分かりになったと思いますけど、本当は、東京の

新聞社、地方紙の新聞社が本当に現実を知っているかどうかというのを、もう少ししっかり考えるべき。自分で考えるようになると、少し変わってくるのかなあというふうに思います。

もうひとつ、皆さんもうひとつ今かなり問題なのが、地方の閉塞感。まあそれををてこ入れするために、ビジネス活性化を促進する法律を作った。そのなかではタウンマネジメントオーガニゼーションという TMO という地域組織、法律で、地域を管理運営を行う機構組織を作ることができるようにした。今日は皆さんの話を聞いていて非常にこの地域の取組がまさに TMO ですね。こういった活動、こういう形というのがやはり地域にあった形なんだと思う。地域のなかで、それぞれ地域にあった形があるんだろう。

ですから是非農水省の施策や整備などを考える時にですね、土地土地、地域地域にあった施策を検討していただきたい。今日のお話聞きながら、また強く感じました。

Q 若者の定住ということで、あの住宅が作られていると思うのですが、その辺を説明願います。

A あの市町村では、今まで誰でも入れる住宅というのはね、作とったわけではない。

この地域は便利のいい地域か、便利の悪い地域かいうと、私自身は、便利の悪い地域と自覚しておりますしかし、この地域はだめだという感覚ではありません。この地域をどうすりゃええかということをやいま私ながら、我々格闘しておるわけなんですから、将来の担い手、町や小学校の存続ということを考えてたら、この地に来ていただく皆さんをね、やはり定住してもらわなきゃならない。

そういうことで若者定住対策ということを提案させていただいて、そしてあのお好み住宅を作りたい、そういうことを行政のほうにお話させていただいたんです。お好み住宅とはどういうことかのう、よく言われますが、これはまあ、文章に書いて出してみたわけですが、まず 20 年住んだら払い下げていただきますということがひとつ。当時はそれは合併前ですから、町営住宅を払い下げようというのはどういうことだと言われました。おそらく県内にも事例がなかったんです。

そうすれば、担当課長はすぐ我々の説明を聞くまでもなく、そりゃあまあ、そういうのは制度がありませんから、無理ということだったんです。そしたら、合併前のその町長さんが同席されておましてね、地域の皆さん方が時間をかけて議論してきたものについて、どうすれば我々が応えていけるかという議論をせずに、制度がないからだめといったんじゃいけん。時間をかけ

て勉強しよう、ということになりました。

要は過疎債で、住宅を建てるわけです。そりゃかなり無理ですからね。町も無理されとるんですから、外に出て一切言うなと言われておりましたが、我々は嬉しくて「高宮町はこういうことさせてもらってる」と言っております。我々が提案して、こういう住宅を建てましたということで、現在 23 戸建っております。

小学校にはいま 23 名の生徒がいるというわけなんです、23 名のうち、三分の二はよそから来ています。地元の子達といたら半分もおらんのです。お母さんたちというのは、やはり都会に住んでおった方なんです、やっぱり田舎暮らしがしたい、そして子供にふるさとを持たせたいということをおっしゃいます。こういうことがしたいなということで、本を読んで、今度は野菜を自給自足ということをしたと。こういう方においでいただくわけです。

将来とにかく安心かと思ったらそうではありませんが、そういう地域活動をしていかにやらんというね、そういうことを、多くの方に来ていただいたから余計に、そりゃあもう、感じております。

それで、家賃は 3 万円です。20 年住んで、20 年先の物価価格でその払い下げる、という制度。そして、自己資金があったら、建物のグレードを上げる、あるいは独りで住んでもいい。都会から、年寄り呼んでもいいですよというようなことまでやっておる。

で、集落にいて住まれた方は、必ず元いた集落に入ってくださいにしている。ひとつの団地としてみるんじゃなしに、団地として住宅を作ってるわけですが、その団地の機能というのは、もっと集落に入って、一緒に活動するということです。

したがって、義務教育の子供がいる、地域活動に参加する、20 年住む、20 年住んだら、払い下げるというわけなんです、建売住宅じゃないので、建物の設計が自分でできるわけです。設計できるところまで結局、認めていただいたということです。みなさん非常に喜ぶわけです。地域活動にもかなり参加されておる。

しかし、すべてのものがそうかという、そうではない。今の社会状況の中で一番私が困っているのは、川根地域に働くところがないこと。皆さんのところの三次なり、安芸高田の吉田に行くということになれば、車で 40 分くらいかかるわけですね。

しかし、そこまで通って勤められておられる内容というのは残念ながら、派遣社員ということで、今回の雇用の問題でね、また次の仕事を探さなきゃいけないというような厳しい状況があるのも事実です。

農業にはそりゃあもう、携わっていただいております。はい。

Q これからずっと、家を建て続けるというのは、非常に難しいのでしょうか。  
A だめです。非常に難しいと思います。今の市長はこの田舎の辺鄙なところに無駄な住宅建てることはない、という考え方です。広島近くに建てれば誰でも入れるということをおっしゃっておりますので、今の政策がこれからも続くということはない。

Q それでは子供いなくなるし、大変じゃないかと思えますけれども。  
A そういうことです。

Q どうされる？  
A 今、10年間の建設計画、新たなものを諮問機関に出させていただきました。いま検討していただいておりますので、11月頃に結果があがってきます。またそこから、計画を立てたいと考えております。ですから、こういう所においてしっかりね、中山間の状況というのを把握していただいて、そういう地域のための制度というものは国なり、農政の方になり、考えていただく。そういうことをしていただきたい。

Q 事実上難しいですか？  
A 難しいです。空き家対策もあるわけですが、空き家は実際家財道具があり、整理をしなければ貸せません。盆正月には帰るのでと言われれば、もうわがままではない、そういう人が多いのが事実。そこまで整理して、人に貸せるという家があっても、自分のふるさとを捨てるという、感覚になるということなんです。年に2回帰ってくるふるさとが自分には必要ということになる。空き家対策は非常に難しいという実態です。

Q 働く場所として、川根地域だけでなく、この近辺に、何かそういった、働く雇用の場の誘致といのは何か考えておられますか。  
A 企業誘致というのが一番手っ取り早いことは分かっているんですけども、なかなかこの中山間地域での、企業の誘致はかなり困難な状況。やはり、広島市にはあると思うんですけども、周辺部のほうにかなり多くの方の職場を設けるといのもも並行して進めながら、周辺部への通勤が可能な状況を作っていきたいと考えている。

また、いわゆる SOHO というような働き方で住まれている方も、徐々には増えておりますけれども、それもまだ多くはないです。インターネット環境というのも整備されておりますけれども、まだまだ途中でして、起業をしていくというのは少ない。少しずつ増えてはいますけれども、まだ多くはない。

また、農業で新たに起業したいという意向を持たれる方も徐々には増えてきていると聞いてはいるが、具体的にすぐ来年から生産だというような話は、まだありません。

そうした就農者の方には私どもはいま、農業に従事しながらまずは産直で売れるものをつくる。それから徐々に基礎編、実践編を組み合わせながら、徐々に就農というかたちを進めていく。段階的に整理していく必要があると思っています。

Q 農産物の直売所は市内に何カ所あるのですか。

A 直売所は、民間の施設がこの7月、年間6億くらい売り上げる目標で今、建てられているところ。市が作ったものも小規模のものもある。一番近くにあるのは農協と一緒にやっているもの。

Q あの、住民自治活動の財政的支援は、昔の旧町単位の6連合なんですか？

A そうです。

Q 上への申請はなにか？補助金とか考えていないのですか。1,800万が活動支援、2,400万円が事業支援とありますけれども、1,800万というのは交付金か何かですか？申請とかどうするのですか。まあその土地、その土地によって違いますが、補助金というのは400万円で何に使えるのですか。

A これまずあの、連合組織への配分として渡されます。旧町単位でそれぞれの地域性がある活動のために使うためです。一律のあるべきものではなく、旧町ごとに住民の方のそれぞれの取組にあった使い方になり、その使い方は全部違います。それぞれの取組に併せて連合組織に対して、活動支援として300万円、事業支援助成も400万円を限度に渡しています。

Q 具体的には何が出来るのですか。

A 活動支援そのものが交付金ですので、これは自由に使っていただくということにしております。活動交付金を6連合組織に300万円ずつということですので。300万円平均ということで若干、人口等もありますけれども、300万円平均でお配りしますので自由に使ってくださいますということにしてあります。

Q 自由に使っていいのですか。

A ただ飲むだけじゃだめですよ。活きたお金にしてくださいと言って渡してあります。しかし、地域ごとの振興会ごとのやりかたは全部違います。

Q ソフトでもハードでも使えるのですか。

A はい。ソフトでもハードでもいいです。祭でもいいですし、福祉でもいいです。

Q 下の補助金というのは？

A 補助金についても 400 万を限度としてお配りします。それ以上出る分については、自己負担であります。

Q これも内容は同じなんですか？

A 事業支援助成は特色ある地域事業への補助ということで、これは申請をしていただいて、審査をして的確だと認めたとお金はお金は下ろします。交付金はそのままポンと連合組織に渡しますけれども、補助金は意欲のあるところにお金が行く形になっています。

Q 特色ある地域事業とはどういう内容ですか。

A これは、地域ごとに地域の景観をつくるということもありますし、福祉活動をやるということもありますし、生産活動をやるということもあります。これは地域ごとに、地域の方々が計画書を作って申請されたところに、補助金として配布しますという形。例えば行政の方で項目を設けてこの地域はこれに当てはまるからお金を出します  
というような形はとっています。ですから、その都度審査をさせていただいて、確かにこれは地域の課題の解決に役立つな、という形で、そこはかなり緩やかな対応をさせていただいています。

Q この連合組織というのはどういうものですか。こういった川根振興協議会みたいなところがいくつかあって、その代表が集まったような組織になるのでしょうか。

A 組織そのものは旧高宮町では、8つの振興会があり、その組織の代表の方々に集まってもらって、連合組織を作ってもらっていますので、中に行政が入って何とかしようということではないです。あくまで、住民の方々の自主的な組織です。

Q よろしいですか。辻駒さんのお話を聞いてですね、非常に地域をよくご覧になっているというか、感動してお話を聞いております。ちょっとひとつふたつお聞きしたいことがありますして、ひとつはですね、農地組合法人ですが土地がどのくらい集まっているのか、教えてください。

それからあの、年金プラス 30 万円というお話がありまして、30 万円作るためには土地がどれくらいですね、農家の方は必要か。要するにどれくらい

の土地で、生産すればプラス30万ができるのか。

もうひとつはこの地域で農業によるまちおこしの可能性があるのか。そういう、アイデアがあるのかどうかということをお教えください。

A あの、農地の集積は今、80haのうち、60haほど集積させていただいております。

その60haに対して、国と県から10aあたり、3万円だしていただいている。

Q 今度の補正で10万ですか？

A ではなくて、これまで1回だけです。農事組合法人を作って、で今度は、農地の集積をした、それに対して1回だけしか補助金は出さんわけです。先のは、1800万ほど、準備いただいているわけです。

で、この補助金というのは、要は農地組合法人を作ったから大型機械なりを買うときの資金にせえということなんです。それはじゃあムダだ、今そのある農器具はどうするのか？

それなら、新しい農事法人作るということ、1,800万は地域経営というんですか、要は、農業に対する運営資金、運転資金そういうものに使わせていただきたいとお願いしました。

しかし、なかなかそれはだめだというお話になってますが、がんばってやっておるわけなんです。けれども、あの、じいさんばあさんに対する、また母さん父さんも入るわけですが、そういう方が今まで農地を守ってきて、そこで生活してきた、それに対する補助金は一切ないわけです。

ですから、この1,800万というのはもういっぺん地域に還元する。生きがいやる者、まだ意欲のある者、そういう方たちがアイデアを出して、うちはこういうことをしたい、ああいうことをしたい、そういうことの事業をあげてもらって、それに見合った分だけ、そのお金を使わせる、そういうことです。

Q その集めた60ヘクタールをどなたか、担い手が何かをやっているわけではないのですね。とりあえず集めただけで、それぞれの方がおやりになっている、そのイメージでよろしいでしょうか

A 担い手の方々も法人組織に入っているわけです。大型農家といわれる方、大型農家といっても4ha位、たとえば、担い手の方も6ha、7haくらいしかつくってらんわけです。

川根地域には、3人しかいない、この農家にも入っていただいて、こういう組織に180なんぼの組合員さんがおられるわけです。

そこで今度、農地を利用した生産活動をしようという、ということで年金

プラス 30 万に取り組んでいる。川根地域の人口は 600 人切っているわけですが、極端の話が、300 人が高齢者ということになれば、30 万かける 300 人で 9,000 万円。この地域でも何もせんここに住んどるじゃなしに、ある程度汗かけばそれくらいの儲けにはなる。企業誘致なんだといっても大変。

しかし我々の働く場を作り、地産地消ではありませんが食の安心というものを考えた。

我々の生き方を考えれば、そこで生活できるそういうことを今、話をしているわけです。

それともひとつ法人組織が何にもしとらんじゃなしに、30ha ほど農地の集積をしている。30ha 以上すると生産調整といまして、減反政策をしなくてはならない。安芸、高田でも 32 から 33% せにゃならんわけです。それを、30ha 以内の集積すると、15% でいいわけなんです。ですから今 7ha 程で大豆を作って、加工食品をつくっていく、こういうことを法人としてみんなで行っているところです。

Q 農地は 60ha 集めましたよね。問題なのはその集めた 60ha を作ってどういう農業やるか、どういう風に売り上げを上げるかというのが、非常に重要で、そのところで、今の話だと、一人当たり 30 万円、9,000 万円くらいの売り上げを上げる。つまりそういう農業を目指している、そういうことでよろしいのでしょうか。

A はい。

Q 具体的に、それができるような感じなんですか？

A そうですね、いま、自分の中で田舎の皆さんというのは、自分たちで食べる野菜というのはほとんど作っておられるわけです。それを少し、とにかくその倍作ってくれば、

そのものは、捨てる、廃棄するんじゃなしに、それを収穫して産直市なりにもって行く。

で、私が今言っているのは、子供のところに送っているものに代金を請求しろと。

そこから販路を出していただければ、地域のじいさんばあさんの小遣い、月 2 万 3 万円の小遣いが、年金にプラスなるじゃないですか。意識調査をさせていただいたら、20 代 30 代 40 代の方は、今の給料にプラス月 10 万円以上あれば生活が安定すると言っている。

しかし、60 代以上の方は今の年金にプラス月に 2 万円 3 万円くらいあれば孫に何か買ってやれる、みんなワイワイできるというような思いを持っているわけです。ですからそこをヒントにしてから、年金プラス 30 万でいこ

うやと今がんばっているところです。

Q やはり重要なのは販売先ですよね。どこに売るのが。それは産直と直接販売がありますが、何か、どこか売るところはあるんですか？

A あります。あの、さっきもお話ししましたが、安芸高田の中にも産直市が2箇所あります。また、今度は安芸高田の人で、広島に出ている方がどこに住んでいるか調査すると、ふるさとに近い所に家を建てておるわけです。そういうところに出かけて行って販売します。

この10月から今度私どものところで、タクシーもやるんです。そういうことをやれば無駄にさせるんじゃないし、農家から生産されたものを集めて回って、実際に販売する。今、計画しているわけです。

それでやっぱり、食の安心安全ということで、消費者と生産者がしっかり声かけできるような関係、そんな野菜作りというものが基本にならなければならない。この地域において無人市を作っているわけなんですけど、無人市でも地域においてひとりの方が年間40万円稼いでいる。

これでも田舎だからそれは100%このようなお金の貯金箱じゃないですが、それに代金を入れてもらっておるわけですが、歩留まりが6割か7割位しかたまりません。100円のものですがね、中には1円か5円しかはっていない。計算すると6割7割くらいしか儲けていない。それでも、わしが作ったものを喜んで買ってもらえるなら、作るもんとしてはありがたい。そういうような農家があるんですね。

無人市に出していただいた方には、法人組織の下に営農集団をつくつるので、その営農集団で補填したろということになってます。おじいちゃんが誰でもマイナスでなく、そういうことでやっている。本当に地域の皆さん方が無人市場に、せっせと野菜などをもって行く姿を見させていただくとですね、これは全部儲けとうじゃないしにわたらの生きがい、健康の秘訣という声を中心で。

Q よろしいですか。私も辻駒さんのお話を非常に感動して聞かせていただいたんですけども、こういう話とか、アイデアっていうのは日本全国皆さんが頭の中では持っているし、集まって酒を飲めば話になる。問題は誰がやるんだということであり、壁にぶち当たったときに誰が後援してくれるのか。これが現実なんですね。まあ、反対する人がいてもそれを乗り越えられる。少しずつ、ひとついい面が出てきた。すばらしいことだと思うんですけども、ただそういう、動機とか、モチベーションというのは辻駒さん以外にやっぱりやりたいという、そういう推進役というのは育っていくものかどうか。

経験ある人達に怒られてしょぼんとなっちゃったりして、だから言ったこっちやねえじゃねえかと言われることもあるでしょう。だから推進役的な人の次がこう出てくる仕組みというのは何か、お考えなんですか？

A そうですね、あれ、私自身もこういう組織にいて、以前はやっぱ親を見たときに田舎に住んでおるといことが、自分自身マイナスイメージ持つんですね。うだつのあがらぬ田舎もんというね。私も同級生が広島の方から帰ってきたときにですね、家の陰に隠れた時期もありました。その時期はですね、都会に出たいというね、思いがあって、こういうところにおるのが嫌だった。だから、本当、親父を見放して出て行くわけです。

しかし、そこで自分の親の生き方含めて、地域の皆さんの生き方が、まさにこれがもう、自分の生き方になるになるんだと思ったらね、非常に失礼な言い方になるかもしれませんが、これじゃならん、ということだね。それで地域を守るんじゃなしに、守りから攻めの運動をしていかないといけん。地域の皆さんの意識を変えなきゃならん。

行政に頼るんじゃなしに、自分らから要求し、提案しなきゃならんと。一生懸命地域の皆さんに訴えるわけです。地域づくりをせにゃならんですよ。

地方会の会長になったときに、地域の共有財産という感覚を持って、これからはまちづくりをせんといかんと。やがてそりゃあもう、地域に住むものがおらんようになって、農地すらなくなる。そういうことが心の過疎につながるという思いです。成功するだなんだ考えてはいないんです。自分たちがここでどう生きるかということ、危機意識をもたんと、そこから脱皮できんなあということなんです。

子供というのは、親の後ろの後姿を見て育つといいますが、それはすごいなあと。今生きているものがどういうものか、子供たちが見るんです。今まで自分ら親がそりゃ、地域を出る教育、地域を出る子育てを私の親はしてきたわけですよ。その親が年を取ったから帰って来いというわけですね。自分のふるさとを誇ればいいのですが、大学に入って都会に住んでる子どもにただ帰ってこいと言ってもね。

ですから、小学生の親、要は子育ての世代の皆さん方には決して無理はかけんです。

要はやらされる活動というのは、感動がない。そういうことで、自分自身の生き方を地域の皆さんに教えたわけではないんですが、要は役場のやり方、そして自分らがどのような生き方をしてきたかということを考えてきた。この地域のすばらしさということに非常に感謝しております。

Q 簡潔にお聞きしたいのですが、地域の人動くのにはですね、辻駒さんが

やっていることを最初はみんなそれ、何を言っとるんだろうか？というふうな感じだったと思うのですが、何か皆さんが変わった成功体験というか、皆さんが動き出すきっかけとなったことはあるのですか？

A やはりこれは地域の皆さん方との飲み食いですね。本当に自分の親もそうだったんじゃないかと思うんですけども、その時代はね、寄れば一升飲んだ、二升飲んだと言ってましたね。古いアルバム見るとそういう風な写真があります。私はそういう地域のコミュニティというのは、大切にし、続けにやならんかあと思っております。当時は、何ぼお酒飲んだかで決まるというような感覚だったんです。

今、車社会になってね、地域の人がここに集う形にしたのですが、この田舎でも、飲酒運転は厳しくなりました。今は何かとにかく、晩酌は家でのみゃあええという感じで寂しさを感じます。なんかコミュニティが崩れていくんじゃないかという様な危機感がありますね。

Q そういう飲み会を定期的にやってますか。

A やりますね。でも、絶対に飲酒運転はさせません。先日もホタル祭り開催した際に打ち合わせなどで集まりました。ホタル祭りはこの地域に、4,000～5,000人くらいのお客さんが見えます。皆さん方が感動します。

そういう素晴らしい地域に、我々がおるということで、みんなの意識が変わる。誰かに動かされたんじゃないしに自分らが地域の資源なり、人間というものが動いたということです。

Q この協議会をおつくりになって、ホタル祭りまで20年かかっていますけれども、これくらい時間がかかるものなのですか。

A ものを製造していますが、我々は日々生活している中でやってきました。イベント屋ではありませんので、生活の場面場面でものを考えて協議会を立ち上げてきたということです。その中でまさか農協が合併するとか、中学校がなくなるとか、そういうようなことは想定していなかった。さらには、町村合併。そういう危機感の中で、次のエネルギーを興していくということです。

Q 今あの、農山漁村活性化プロジェクトがあつて、農業体験ができる支援もあり、それはいいことではないかなと思いますし、それについてどう考えていますか？

A あの、この施設も40人泊まれるわけです。2階に上がっていただけるとわかりますが、2段ベッドがあり、都会の子どもを家族を迎え入れるように作ってあります。それには地域の皆さん方の日々の生活がポイント。よう来ん

しゃったということが言えるような環境が大切。田舎のおじいさん、おばあさんというのは、我々もそういうような意識になってきたわけですが、お互い様、お互い様という感覚。金儲けのために仕事するんじゃないしに、人と触れ合うことによってアイデアが生まれてくる。そしてまた、土地というものに対する意識も変わってくる。今まで当然のごとくやってきたことが、これだけのものを作ればこれだけ儲かるということを教えてもらった。

その活動というのは川根振興協議会の活動につながっており、皆さん方が頼っており、我々がそれに参加している。ですから同じ酒でも、一升瓶出して出すお酒と、昔からある甕の中から飲ませるお酒というのは味が違う。同じ酒なのに味が違う。二級酒で特級酒じゃないのにまた味が違うってですね。田舎の生き方ということじゃないが、そういうひとつ飲み物にしる、食べ物にしる入れとる器、料理の方法によって味がぜんぜん違う。

Q 農家民泊はありますか。

A まだないです。ここの施設から農家や炭焼きの体験に行くというスタイルですからね。

民泊になると食べるものの世話が大変。わしらが食うもんでええといっても、せっかく来てもらったんだからというおじいちゃんおばあちゃんの気持ちがあります。民泊に来たものは地元のおばあさんの料理、それが食べたいわけですけどね。

今はまずは受け入れる地域づくりから始める。宿泊はエコミュージアム川根を使うとを考えております

(以 上)